

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 大橋秀一郎

No. 5

平成3年7月1日発行

編集：総務委員 矢倉 睦

▷▷▷▷ ランタンリルン第1次遠征隊30周年記念号 ◁◁◁◁

ランタン・ヘリコプターハイキング

月 日： 平成3年4月28日～5月5日

参加者： 森本 薫。三島義彦。大嶋啓三（健司氏の実弟）。藤本 勇。
西田 新、すみ。小笹 孝。岡本恒夫、育代、彩。佐々木惣四郎、
春子。藤村達夫、明子。島川 勝。浅野清彦、初子（関西登高会）。
小寺圭美（近畿山岳愛好会）。小笹美智子（小笹君の姉）。
宮川憲明（藤村君の友人）。計20名

費 用： ￥405,000.-

海外遠征30周年記念として、ネパールのランタン谷へのトレッキングを計画しました。上記の方々の参加を得て楽しい旅ができました。2年前のトレッキング（山岳会ニュースNo.2参照）の時、頭上をヘリが飛んでいたのを見たときから、次なるときはヘリを使ってゆっくりリルンを見たいと思っていました。

参加者を締め切る前に、森本、大嶋両家に計画をご連絡すると、森本夫人から是非とも参加したいとのこと。また、健司氏の実弟も参加されたいとのこと。この計画を立案したものとして有意義なものとなりました。

ヘリを飛ばすに当たっては、ヒマラヤ観光開発の宮原氏がネパール在住30年のキャリアを生かしてご尽力下さいました。

ランタン部落の小学校に学用品を持参して寄付してきました。人口900人余りの部落に小学生60人で校舎もなく、野外授業しか出来ない。長い雨季や積雪期の際は勉強したくても出来ない。何とか校舎が、我々の手で建てられないものかと

思いました。僅かのお金で校舎が建てられるとしたら、市大山岳会としての援助の方法がないものかとも思います。(藤本 勇)

ランタン トレッキング

大嶋啓三

今回の企画をお聞きした時、我々兄弟の面倒を良く見てくれた兄をふと思い出し又、八十才を越えた母親へのちょっとした孝行にでもなればと参加させて頂いた。

ネパールは初めて、四千米近くの高所も初めて、ヘリに乗るのも、トレッキングシューズを履くのも、同行の方々との旅行も。

いったいどうなるのか不安と期待のランタントレッキングも一ヵ月後のいま振り返ると、予想以上の迫力とハプニングの連続で、あの苦しかったランタン部落の行軍も、頭が割れるかと思った高山病も、実に楽しい思い出となっている。

その中でも特に印象に残る二、三の事を記させていただきます。

(キャンジュン・ゴンパ到着)

本来はカトマンズより歩いて五、六日の行程との事。一日天候待ちの後のヘリでの出発。予想外に静かで安定した飛行三十分。急に眼前に広がる雄大なヒマラヤ連峰の大パノラマに息を呑んだ。そして大空港(河原)に到着。ここが高度四千米近くの高地?と疑う素晴らしい五月晴れ。壮大な景色。何と名状し難い気持ちになった。

(ランタン村訪問)

二次隊の方々がつくられた森本隊長や兄達の墓碑にお参りする。住む人九百人余、その村のはずれの山裾、展望の良いところにあった。キャンプ地より二時間の後、到着した時には、皆さんは平気な顔なのに、こちらはフラフラ。その時撮って貰った写真を見ると顔に全く表情がない。どうやらこうやら般若心経を唱え終えた時は、安堵の気持ちが抜けるようであった。

キャンプ地への復路は多少の昇り気味、この三時間は正に地獄の行進だった。頭は酸素を求めてギャンギャン痛む。息はハァーハァーゼーゼー。心臓がプシュッと飛び出しそう。雪降る寒さで手足は感覚がなくなる。藤本隊長や宮川さんがスーパーマンに見えた。本当にもうダメだと思った時に入った山小屋、真っ暗な中で飲んだ紅茶一杯の暖かさが忘れられない。

半死半生でキャンプに到着。それから丸一日余は寝っぱなし。同宿の小笹さん、

皆さんご迷惑をお掛けしました。

(カトマンズの街で)

朝六時のすがすがしさとは対照的に九時以降は車の廃ガスが充満する。この町には、身の回りの品を手元から放しても安心な感があった。値切りまくる土産品の買物、牛とその糞のころがるコースで一風変わったゴルフ。やたらと人のあふれる町。外人としての町々と人々との出会いだったが、何か心をゆるせる処だった。

思いもよらぬ異体験の数々、これからも折々思い出される事と思うが、その思い出と共に、この旅を計画された藤本さんや、こんな処に行かれる、さすが個性豊かなメンバーの方々との出会いが心に残る。

又お会い出来る日が本当に待ち遠しい。

リルンを見て

三島義彦

悪天候で1日待機してヘリコプターが、すーと地上から上がり、藤本君からこれでとうとうランタンが見られますねと声をかけられた時、一瞬ジーンと感情が走り目頭があつくなった。

ヘリはランタン谷に沿うて低空を飛ぶ。リルンが見えるはずと探している間に、25分のフライトでキャンジュン¹の飛行場に着く。5日ないし6日のトレッキングの行程が25分とは有難い。いきなり 3,800mに上がったので高山病への不安がちょっとよぎる。歩き出すと何となく調子がおかしいし息切れするように感じる。キャンジュン・ゴンパへビスタリビスタリを口実にしてランタンリルンを心ゆくまで眺める。遠く近くキムシュン、ナヤカンガ、ホンゲントプケ等に取り囲まれた眺めは正に美しいパラダイス。

雪をつけているリルンはおだやかなとも見える山容で写真でよく見た通り、そしてリルン氷河にひきつけられて見入る。30年前のことが走馬燈のように駆け巡る。

キャンジュン・ゴンパには多くのトレッカーが来ていて、25以上のテントが張られていた。

皆がランタン部落の碑に参っている頃。メンデルスゾーンのヴァイオリンコンチェルトのテープを流して壺を慰める。森本君がこの曲が好きだったはずと。参られなかったのは全く残念で、申し訳ないと思っても午後からは私には無理。

止むを得ないこと。16時頃から雨、霰となった中を皆帰ってくる。

翌日は20年前、当地で亡くなったと聞く前田光雄氏へのケルンを桜草、アヤメの咲く中に積んで、福田源四郎氏書の般若心経を納め、菩提を弔う。

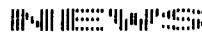
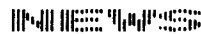
18時頃より雨、霰、やがて雪となる。豪勢に雷鳴が轟く。折角来たのにもう帰るのかと森本君等が怒っているのだろうと話し合う。

朝方4時頃テントの外へ出ると雪は止み、山々は黒いシルエットの中で、テントは雪をかぶって雪明かりの中に陰影をならべ、静まりかえった空気は全く不気味なまでの気配で、この中リルンを暫時追って別れをつぶやく。

朝、風が吹き雪の舞う中を迎えのヘリは来る。折返しの便は悪天候で飛ばず。2便の方がカトマンズのホテルに入ったのは19時頃というハプニングが起こる。

もうトレッキングでリルンを見ることは駄目だろうとあきらめていたので、テント2泊となった短い日程だったが、リルン、リルンと長年頭の中にあったリルンを見られたし、更にヘリにも乗れたし、酸素は吸えなかったが吸う必要がなかったので良しとして、又1度はヒマラヤの山の中で聞いてみたいと思っていた音楽も聞けたしで、私には実に実りの多い、満足感に満ちた数日であった。

よくも連れて行って貰えた藤本君の立案から始まる多大の御尽力に感謝し、この身体では皆様方の励ましの賜物と感謝し、また宮原巍氏のご高配とご援助に深く御礼を申し上げる。



★★ 大阪市立大学体育会・応援団創立30周年記念式典開催さる ★★

去る4月12日の日曜日あいにくの雨模様の中、田中記念会館に於いて、市大体育会、応援団合同の創立30周年記念式典が催され、山岳部からは岡本、矢倉、小松の3名が出席しました。来賓の方々からの祝辞の後、体育会、応援団の関係者よりお礼の言葉とともに、体育会ひいては市大のこれからの発展のために、各OBの方々にますますの協力について要請がされました。事実弱体化している各体育系サークルを考えると、各OBとしても頭の痛い話だと思います。OCUSA（市大スポーツアソシエーション）についてもそうですが、これからはOBの方

々の協力がより求められると思います。

同式典も4時には閉会となり、5時から場所を変えて日本橋の「ビジネスセンター三水」において懇親会が開かれましたが、さながら応援団の同窓会といった雰囲気ではささか困惑しましたが、歴代の体育会幹事の方々などから昔の苦労話をお聞きし、今かかえている課題、山岳会にも共通する問題等いろいろと勉強させていただきました。

(小松 稔)

★★ 大阪市立大学スポーツアソシエーション第2回定例総会開催 ★★

6月22日(日)市大田中会館にてOCUSA(市大スポーツアソシエーション)の第2回定例総会が開催されました。山岳会からは、OCUSA副会長である大橋会長、藤本、福山、小松、矢倉が出席しました。平成2年度事業報告、収支決算報告に続いて平成3年度の計画、収支予算案が審議されました。今年度から優秀クラブ・選手の表彰が事業に含まれており、早速総会の場において最優秀クラブ賞、最優秀選手賞、新人賞など今年度の表彰が行われました。今年で設立まだ2年目ですが、着々と地盤を整えている現状です。総会の場においても質問・意見が積極的に述べられていました。

体育系クラブOB連合会としてのOCUSAですが、体育会加盟クラブ49の内OCUSAに参加しているのはまだ27であり、今後、より多くのクラブの参加が望まれます。また、大学と市大スポーツの振興には各OB会それぞれの意識の高さが鍵を握っていると思われます。我々山岳会としても、山岳部のさらなる発展を期待すると同様に、他クラブの振興も期待したいところです。

(矢倉 睦)



☆ TROPHY DECS ☆ TROPHY DECS ☆

★ ボート祭への参加

月 日： 5月26日（日）

参加者： 清原、岡本夫妻、西村夫妻、奥田

参加枠が1チーム取れたから行こう、との岡本氏の呼びかけで第100回記念大会に参加することになった。はるか昔には「ピッケルクルー」のチーム名で勇名をはせた山岳部であるが、当日参加者にその意気込みを望むべくもない。完走とビリにはなりたくない思いで出番を待つ。

岡本氏のお嬢さんがコックスの市大囲碁部は残念ながら1回戦落ちとなる。10時50分スタートが1時間遅れのため、タコ焼きをほおぼり、他レースをのんびりと観戦する。天気は上々、ボート日和。さて、応援の岡本夫人に記念撮影をしてもらい、いざ出陣となったが、レースは川下に向かって行われる関係で、スタート地点へ行くのに意外と疲れる。

レース結果であるが、正コックス西村夫人、プレイイングマネージャー西村氏による奮闘号令と、円熟したオールさばきの清原氏の努力下、当初予定の2着となる。終わってしまえば謙虚な気持ちは吹っ飛んでしまい、缶ビール飲みつつ欲が深まってゆくのは人情である。来年度からは2チームを送り出し、本命チームには「ピッケルクルー」の栄光を復活させることを衆議一決する。そして、レース後の選手及び応援団の慰労会場の手配までする段取りの良さ。残るは強力な参加者の募集のみ。

会員各位の積極的な参加申込を募ります。

（奥田 寛）

★★ ゴルフコンペのお知らせ

本年の開催日程が決まりました。

山岳会特有の、順位にこだわらない楽しいコンペになろうかと思われます。

月 日： 平成3年8月14日（水）

場 所： 神戸ゴルフ倶楽部

※ 当日は3組でエントリーしています。

※ 参加申込みは事務局までご連絡ください。

※ スタート時間・集合場所は後日ご連絡します。（幹事 岡本、苑樹）

★★★ 本文で小松氏が紹介していましたように、先日体育会・応援団創立30周年の式典が催されましたが、その席で創立30周年記念応援歌なるものが披露されました。さながら山岳部のための応援歌のようでビックリ。以下にご紹介します。

しらぬ
白銀の翼 篠田 恭一 作詩

1. 今日くれないの 沸き立つ雲千切れ

ああ翼ゆく 白銀の翼ゆく

栄光の勝利を前に

鍛えし 胸の血潮ぞ火と燃ゆる

2. いまふり仰ぐ 八重なす氷壁よ

ああ輝かせ わが力この光り

常勝の戦士の上を

ランタン・リルンの^{しらぬ}丈夫 みそなわす

歌詞は一般公募されたようですが、披露にあたってランタン・リルン第1次隊の遭難について説明がありました。とはいえ、いつもながら応援団の歌は全く音程が聞き取れず残念！（矢倉 睦）

★★★★ 大阪以外にお住まいのOB諸兄、近況いかがでしょうか。何でも構いませんのでご寄稿下さい。事務局までお願いいたします。

ランタン・トレッキングにお連れ頂いて

森本 薫

「1961年」逆さから読んでも1961年！！と十才と七才の子供達と面白がって年賀状をこしらえて居りました夫が五月にランタン・リルンの第3キャンプとやらで不帰の客となりましてから30年。

よく似た様で非なる年号の年となりました。逆さから見るとベルサイユに薔薇でも咲きそうである。何か手向けの気持を型にしたいと思ってもそうしたイベントに気乗りしてくれぬ息子に相談するのも気が重くゴールデン・ウィークには先ず第一にきつと大嶋健司様のお母様をお訪ねしようと心に定めておりました。

年頭の賀状の中に藤本様より

『リルン部落までヘリコプターで墓参りが出来るか情報を集めて来る積もりです』とお正月を奥様と30年の行事計画の下調べにカトマンズでお越しのご様子でした。

「お誘いを頂いたら連れて行って頂こう」

「ぜひそうなさるといいわ」

年賀のまろうどとも語り合っておりました。三月も半ばとなって殆どあきらめたと言うか、忘れかけていた時、三島氏より電話で、「ゴールデン・ウィークにリルンに出かけます。——」その続きに何を言おうとなさったかも伺わず言葉をさえぎって

「それに私を連れて行って頂きたい」と、

「高山病になるし……。ムニャムニャ……」と思ひもかけぬ私の応答に三島氏は明らかに当惑のご様子。

「高山病にもかかるでしょうし、心臓だって爆発するかも知れないけれど、何もかも面倒みて連れて行って頂きたい！！」

「人数に空があるか藤本に聞いて見よう」

「満員だったら又のチャンスのある人にはどいて頂いて、ぜひねじ込んで頂きたい」強引な申出をし電話は切れた。

翌朝、早く藤本氏より

「お誘いしなかったのは30年前の嫌な思い出をはじくり返されて、不快に思われてはと遠慮していたので、参加して頂けることは私達の計画がすっかり様変わりして、より意義のあるものになると喜んでおります」と言うような思ひもかけぬご丁寧なご返事を賜った。

かくて私の亡夫の終焉の地をのぞかせて頂く旅行に出かけることとなった。

出発の4月28日も素晴らしい日本晴であった。正月とゴールデン・ウィークに名古屋空港からネパールへ直行便が出る由で私は名古屋近郊の娘の家を足場にひとり団体行動からはなれて、小牧空港でお仲間に入れて頂いた。空港まで送ってくれた娘が、空港一杯の登山姿の搭乗客を見て「30年たつと猫も杓子もヒマラヤへ行くのね」と腹立たしげであった。猫や杓子の最たる者は私であろう。

雲海の上に殆ど満月のような大きな月を眺めて、ロイヤルネパール航空機はカトマンズ空港に着いた。

入国審査に並ぶ人は殆ど日本人。外へ出れば夜中と言うのに浮浪児（こう呼ぶのは間違いかもしれない）がジャポネジャポネとはしゃいでいる。名高い観光日本人の一員かと思うと気が重い。

橋を渡ってカトマンズ市の隣パタン市に入る。市街のたたずまいとは異なる結構なリゾートホテルが私達の宿舎ヒマラヤホテルであった。贅沢に慣れた日本人にも何の不足もない。ルームメイトはご年輩のトレッキングがご趣味だなど、意外な生まれも育ちも王城の地、京言葉の美しいおやかなご婦人で嬉しい。

窓から日の出を眺めながら明るい朝を迎えた。手入れの行届いた庭が広がり、お仲間の殿方達がもうテーブルを囲んで歓談しておられる。

まだ樹が若いのであろう夾竹桃は日本のより少し背が低く格好が良い。真赤な大輪のけしが栽培されている他は矢車草、ゼラニウム、薔薇など我々の家庭の花壇にごくごく平凡に植えられている馴染みのもの。花びらがこぼれるばかり満開で遠くの地にいるような気がしないが、小鳥たちはどれも初御目見で何と言う名の鳥であろう。

予定通り市内観光に連れって行って頂く。街の広場では路面に細かい商品をずらりと並べて売っている。客一人に青年子供とりまぜて5人位ぐるとはりついて、手に持った一点の商品を買えと上手な日本語でしつこく迫る。牛がいたる所を悠々闊歩しているせいか、トイレの無い街かと思うような匂いである。蠅が蚊柱のようにぶんぶん舞っている掃溜のような場所もある。入場料の要る旧王宮の中庭に入る。「物売りにつきまとわれなくて、ほっとしますね」と岡本夫人。同感である。

間口一間もないような店が両側にぎっしり並んだ町並みをゆく。買物をする時は値切るのが常識だそうで、そんなにまでして故国に土産にしたいような購買欲は出て来ない。

近く選挙が行われるそうで、街中で太陽の党と樹の党がはげしく闘っている。至る所に両者の絵が描いてある。どちらが保守でどちらが革新なのだろう。

日本でも走っていたような記憶にある三輪タクシーに相乗りで藤本氏に乗せて頂き凸凹道をあわやほうり出されそうなスリルを度々味って、ネパール第一と言われる王宮の近くのアンナプルナホテルに着く。外観も内部もなるほど落ち着いた品の良いホテルである。

皆様の到着をロビーで待っていると、昼食時のせいか次々とフロントに客がやってくる。時折ラフな服装の欧米人がいる以外は、殆どサリーをまとった印度人の家族である。従業員はネパール人。利用客は印度人。印度に植民地化されたネパールの国情を束の間の休憩に感じる。

夕刻、カカニの丘に白き神々の座を眺めるべく連れて行って頂く。見覚えのある街並を過ぎて螺旋状にぐるぐると、ミラーもない細い道をクラクションを鳴らしながら対向車に遭うと、崖縁を後退したり、すれ違ったり、まさに信楽高原鉄道である。所々住居があって子供達が遊んでいる。収穫した麦を大きな束にして紐を頭に掛け、背負った人が一人又一人と登って行く人。降りて行く人。途中はげしい夕立にあった。丘の上は曇っていて、白き神々の連峰は望むべくもなかった。

翌朝はヘリコプターでキャンジュン・ゴンパに飛ぶ予定であったが、悪天候のため中止となる。飛行場の手前にゴルフ場を見付けられた殿方達はゴルフに出かけられた。ご婦人方も市内観光の範囲を更に広げて、意欲的に外出して行かれたが、私は岡本夫人とホテルの庭でのんびりおしゃべり。殿方のお世話にならず無事昼食が頂けた事を喜び合った。

午後はお嬢様と三人でぶらぶら散歩に出かける。ホテルの隣がトリプバン大学工学部らしい。街並に比べるとキャンパスは建物も立派で広々として美しい空間であるが、よく見ると校舎のガラス窓はことごとく割られ、内側に金網が張られて侵入を防いで居る。中をのぞくと何一つ備品が見当らぬ。何の研究がされているのであろうか。アカデミックとはほど遠い。ここの学生だと称する若者が現れて、彩さんを見つけ話し込んで離さない。なるほど英会話は流暢である。お母様は傍の階段に腰掛けてスケッチブックを拡げ、まわりの景色を上手に拾っておられる。何処からか子供が現れてキャンディをもらったり、未だ貰っていないという新手も出てきたりする。学生はなかなか会話を切上げようとしない。

夜は宮原オーナーのご招待で印度料理を頂く。口の中が大火事というような辛いお味であった。蝋燭だけであったか暗い照明のなか郷愁をそそるような素敵な音楽が奏でられていた。

第三日目。今日こそはヘリコプターは飛ぶだろうか。軍隊用の空港に入場が許される。格納庫でヘリコプターが整備の真最中である。休憩所の入口にランタン部落で墓守りをして下さっている人が立っていた。「故人の引合せだ」と思いがけぬ邂逅に藤本氏は感動して紹介して下さる。

二班に分かれて私はお先にヘリコプターに乗り込んだ。町並を眼下に見下ろしている中に焦茶色の山肌が手にふれられそうに、谷間を縫って目的地に向かう。窓外に白き神々の座が姿を現したらしい。釘づけになって食い入るように目を凝らしていた同乗の面々のシャッターを切る音とする。

『リルンが見えた！ 来て良かったなあ！』と藤本氏のくぐもった声が聞えてヘリコプターは着陸した。なつかしいと言うには、あまりにも複雑な。脳裡に焼きついたリルン峰に向かって、盛んにカメラを向けたのであろう。記憶はないのに後日、私の“写るんですよ”のバカチョンに不思議なほど美麗にその姿をとどめていた。

着陸直後、高山病を意識するようなことはなかったけれど、ヘリコプターのタラップを降りたとたん、夏用のトレパンにさっと冷えを感じた。迂闊であったことを悔いたが、素早く下半身を重装備に整え直す事もできず。ブルゾン等厚地の物と着替えて、手袋をするようにご注意を頂き、杖をお借りして、カメラも持たないで下さいと言われ、着のみ着のまま身一つで、石ころだらけの道を歩きはじめる。

「奥さん本当によく来て下さいましたね」と胸一杯になるような事をおっしゃって、藤本氏は私の傍にずっとはりつかれる。一行のリーダーでお気配りご多端の中、恐縮でもあり、私は不自由である。

美しいせせらぎの流れる手前で少し待つように言われる。ジャブジャブと渡れば渡れそうな水量であるがー。ふと見ればいろいろ異なった美しい模様の石ころばかりである。この辺りは土が雲母を沢山含んでいるのか、一個濃い褐色の中にミラーボールのように陽の光を受け七色にきらきら一面輝いているのがある。一つ二つポケットに拾い上げる。「人に荷物を持たせて石など拾って！」と三島氏にお叱りを受け、それもそうだと残念ながらせせらぎに向かって、えいっとほうり投げる。「こんな石はまた帰りのヘリコプターの乗り場にいくらでもありますよ」と藤本氏が仰る。シェルパに手を取ってもらい、投げ込まれた大きな石を飛び石に、せせらぎを渡る。

世界の屋根、白い三角錐が三百六十度林立する、内輪の雪の無い黒い山肌の地つづきの麓のうねうねと続く山道をきびしい紫外線に照りつけられながら行く。

私には豚に真珠であろうが、まこと豪華なすごいばかり贅沢な山歩きである。

「あの場所が遭難地点だ」と遠く指差して教えて下さったり（私が正確に把握出来たか、まことにあやしい）。一物も荷を持たぬ私は他人様の水筒のノズルからお水を頂いたり、あちこちからチョコレート等賜ったりしながら、折り返し後便のヘリコプターで着かれた人も、すでに先着しておられた目的地に到着した。早速用意されていた昼食を頂く。ポテトチップスのようなものは材料がそら豆ではないかと思われる程に美味ではあるが、遠足の日お弁当のような食欲はない。

食後、ランタン部落への訪問は帰路が上りになるので、急いで用意された寄贈の学用品などを携えて出掛けられる。大嶋健司様の弟御に墓前へのお供えの品などお託けする。足に自信のないものなどが残る。私のルームメイト小笹姉もお相伴して下さった。生まれて初めてテントなる物に入る。小笹姉はトレッキングの経験者で寝袋の点検使い方などテント暮らしのノウハウやマナーを教えて下さる。

ふと何処からか音楽が流れてきた。

「こんな景色の良い所に来て、暗いところに入っているとはもったいない」と三島氏が訪ねられる。ごそごそと這い出る。テープレコーダーから第9が回りの山々に響き行く。「こんな景色の中でレコードを聴くのが夢であった」と三島氏。何とロマンあふれる情景であろうか。故人に何よりの手向けであったことだろう。皆様のランタン部落での墓参予定の時刻に山に向かって黙祷を捧げる。丁度3時になったので美味しいヨーグルトを作っているという家に小川を渡って買いに行ったり、気分が悪くなられた藤村夫人をテントの外から声を掛けたりしているうちに、随分気温が下がってきた。テントに入り横になる。地面に当たる部分が何とも冷たい。ホカロンを寝袋の中にほり込んで冷たく感じる所に当たるよう努力してみるが、膨大な面積をなかなかカバー出来ない。

つかうかかと森本が遠征に出発した前後のことなどおしゃべりしたものだから、だんだんに気分があやしくなってきた。食堂のテントの中は暖房されているから行きましよう、小笹姉が降り出した霰だか雹だかのなか雨合羽を着せかけて誘なって下さるが、暖房は無く照明と勘違いされたいらしい。灯油か何かランプの匂いが気分の悪さに拍車をかける。それに冷えたせいか、お腹までしくしくして来る。テントに帰って無我夢中というか必死で横たわっていると、ざわざわして、ランタン部落から皆様が帰って来られた様子。“大嶋さんが——” “大嶋さんが——”と薬を調達する声がして、どうやら大嶋氏は具合が悪くなれたらしい。

「お供えなど快く託かって下さって、ご自分の装備が手薄になられたのでは——」など夢うつつにそんなことを考えながら、こちらビニール袋を引寄せ仕末で

ある。夕食になったらしく「おかゆを運んで来ようか」と小笹姉が甲斐甲斐しく
気遣って往来して下さる。先刻までお互いにテントの出入りは何と頭がぐらぐら
することであらうかと嘆じ合った仲なのに。「お構い下さるな」と思う。宮原氏
ともうお一方見舞って下さったが、脈搏が多くないそうで、こんなに苦しいのに
酸素吸入は当たらない。幸い暖かくなってきて、眠りに入ることが出来た。

朝目覚めると、キッチンボーイがティーとビスケットを持ってテントに一々モー
ニングコールをして回る。そしてテントの外に洗面器にお湯をはってくれる。
顔を洗ってそのままにしておくとか又片付けてくれる。トレッキングとはこんな恐
れ多いサービスを受けるものだとはじめて知る。朝食がすむと皆それぞれ能力に
応じて行動を開始される。私はもとよりじっとしている積もりだが、退屈をまぎ
らす物も持参していたが、何とも懶くそんな物を手にとる気になれない。食堂か
ら椅子を借りて来て周囲の山々を眺める。あやめの花があちこち群生しているが
丈は十糎もない。一本手折ろうとしても硬く地に根をはって花が取れるのみであ
る。きびしい風雪の中に生える植物の姿であろう。山肌と同じ色をしたヤクが地
続きの急斜面に放牧されていて蠢くのが見える。

リルンの前面に立ちはだかる様に、そそり立つ山の麓に近い巨岩に二見ヶ浦の
夫婦岩の様なご弊のようなものがかかって見えるのは、このあたりの信仰の象徴
であろうか。三百六十度急斜面は全部ここから地続きで屹立しているのだが、一
歩でも高度を上げようと云う気は起こらない。昼食に大嶋氏が顔を出され「横に
なっていると頭痛がとれませんなあ」と大分快復された様子。安心する。

山の天気は午後から思いもかけぬ変更をするということを毎日体験する。今日は
雪となった。お出かけの皆様はお帰りになったかしら。三十年前、五月十一日
の遭難前、十日余り悪天候の快復を籠って待ち続けたように聞いたことを思い出
す。高度にも少し馴化したらしい。最後の晚餐でもあるし、今夜はまた合羽を被
って食堂に出かけて行く。食後シェルパ達が歌や踊りを披露してくれ、こちらも
合唱など楽しい交歓の時を過ごす。雷鳴がとどろき降雪もいよいよ烈しいらしく
テントに積もった雪が払われる。雪への防備に心して寝袋に入るが、昼間の労働
不足がたたって眠れぬ。不眠症は慣れっこ。静かに目を閉じて時の過ぎるのを待
つ。午前二時頃トイレのためテントの外に出る。雪はすでに止んでいた。

前面を一周していた焦茶色の山肌も雪を被ってあたり一面真白である。群青一
色の空に昨夜より少し細くなった半月より、大きな月が黄金に輝いていた。すり
鉢の底ではなく、海苔の缶の底と云うか、経験はないが井戸の底から空を仰ぐ様。

四周をぐるりと幾重にも聳え立つ峨々たる白き峰々！ 何時か閉じ込められたクレバスから糸の様に細い三日月を望む想像するだけで凍り付く情景を思い浮かべたことがあるが、その通りそれにも増した凄惨な山のたたずまいを我が身を痛め付けたいような気持ちで暫く佇んで眺めつくした。

明方、少しまどろんだのだろうか。テントの外に「帰る日の朝、リルンが顔を見せた！」の歓声を聞く。本当に前山の肩の部分から顔を出していると言うより、目から上だけのぞいているように頂上の部分が望まれる。昨夜のお話ではドイツ人の負傷者の救援のついでに私供脚弱も近くからヘリコプターに便乗させて頂くようだったのに、予定が変わって、やはり往路と同じヘリポートまで歩くこととなった。早く出発しなくてはと心が急ぐ。朝食の時間を失礼して支度の時間を稼ぐ。ビスケットやテルモスに飲物を岡本氏が運んで下さる。紫外線に備えて化粧のため、岩に腰を下ろして鏡をのぞく。

ふと鏡の中にリルンの頂上が写る。時間にせかされているのも忘れ鏡の角度をリルンに合わせて何時までも見入っていた。一同リルンに黙祷を捧げ、私にはもう再び訪れることのあるまいキャンジュン・ゴンパのテント地を離れた。

背にリルンの頂上を感じながら振り向かず。私の荷物を持ったシェルパに左手を預け、杖をついて歩を進める。はれ上がった顔が涙でぐちゃぐちゃになる。暫く行って喉の渇きを覚え、リュックのポケットからキャンディを取り出して貰うように頼んで止まる。気付かずにいたが往路と同様すぐ後ろに藤本氏がおられる。そして、その後はずらっと市大山岳部のOBの面々が素敵な登山スタイルで一米づつ位間隔をおいて停止。あらぬ方を眺めていられる。

「何たるプレッシャー！」飴玉が口内にころがりこむや行動を開始する。途中、宮原氏が酸素ポンペを擔いで吸入をさせて下さったり、やっと石ころだらけのヘリポートが見えるところまで来た。「爆音が聞こえてきましたから急いで下さい」と前方から伝令。

ヘリコプターは救援用の軍用機であった。同行してくれたシェルパに別れの挨拶をしたのだろうか記憶がない。腰を掛けてヘリの到着を待っていると、「胡麻入りのおにぎりは如何ですか」と藤本氏。ご辞退したらそんな型の石を拾って下さったのであった。

烈しく雪が降り出した。石造りの小屋に入って待つこととなる。灯も窓もない。シェルパが床板をはがして隅の炉で火を焚き、ぬれた靴を乾かしている。火の側に座らせて頂いて熱い飲物やお手持ちの美味しいお菓子など次々回ってくる。私

も紅茶やビスケットなどあるのだけれど、荷物は何処にあるのだろう。何もかも他人まかせ、お借りした杖も入口でお礼も言わず手渡してしまった。

「ヘリコプターが来なくても、もう一度戻るのは嫌！」と藤村夫人が悲しげに宣う。私もあの大がかりご迷惑な移動の往復は辟易である。ここで泊まるとしてキャンプ用の残品はすっかり寄贈して来て、ホカロンも蠟燭もない。

「爆音じゃない?!」一瞬、皆の呼吸が止まって、目玉がでんぐり返った。

「来たァ!!」一せいに表に飛び出して行く。

また急げ急げである。足手まといの女性から先ず乗せて下さるのである。ヘリコプターはトラップの反対側の荷物の搭載口を開けてエンジンも止めず待っている。こんな高い所に足もかけられない。上から引き上げられ、後から持ち上げて頂いて機内に入れた。「帰れる!!」感極った声で私の手を握った人がいた。隣席はルームメイトであった。空席に年輩の殿方も乗込まれて、すぐ飛び上った。山岳部のつわものどもは残られ、大きく手を振りながら離れていった。

「お世話をかけました! 有難う! お先に!」無言の叫びが、ぼろぼろと涙になって流れ落ちる。我にかえると、もうカトマンズ空港の上、雨上りで河の様に黒く濡れていた。折返し後便をお待ちしてご一緒と思うのに、すぐマイクロバスでホテルへと。今日はもうヘリは飛ばないとの情報も聞こえる。佐々木夫人はキャンジュンでのお食事のお世話以来てきぱきと先着組のリーダーシップをとって下さる。昼食の時、奥様方はご主人のお帰りまで禁酒するとおしゃって、皆ジャスミン茶を注文する。さもありなん。落着かぬことである。

宮川氏もタクシーを駆って、あちこち交渉に飛び回って下さっている様子。折角早く帰らせて頂いたのだからと、私は入浴パジャマに着替えて眠る。夕映えが明るい頃、すっかり元気を取り戻して目が覚める。

「ヘリコプターが飛びました! お帰りになりますよ」とルームメイトが明るい声で入って来られた。何と嬉しいことであろうか。お出迎えをと大急ぎで仕度にかかるが、出来上がるまでにもう到着なさったとの報告が入った。

いよいよこの旅行の最終日の朝となる。

マウンテンフライトに早朝より空港へ。好天に恵まれ、白き神々の座はずらりと美しく望める。丁度、飛行機から眺める雲海のごとく綿のようにふんわりとでなく、氷の剣のように見渡す限り、遠くまで林立して並んでいる。どれが何と言う名の山やら説明書を見比べても判然としない。あんなに孤立して美しく仰いだリルンさえ、さだかに判別できない。去り急いだ人にこの壮観さを見せて上げた

かったと思う。ホテルに帰り朝食をとってバドガオンの街へ。ヒンズー教の寺院へ行く。奈良朝年代の建立物だそうである。繊細な彫刻、湿気が少なく保存がよいのか色彩も美しい。そんな遠い時代にこんな優れた文化を持っていた民族に、長い年月に一般大衆の生活は余り進歩が無かったように思う。

次の見学先サハハリパーク迄の長い道中で、あちこちの畑で馬鈴薯を掘っている姿が見られたが、一族郎党総出でたらたらと少しの収穫の山である。もっと多種多様な農作物を栽培する工夫をして、豊かになる努力をしないのだろうか。他民族の従僕として、どうしてあんなに従順で柔和でいられるのだろう。

鹿しか居ないというサハリ動物園で印度象に乗って、泥んっこ道のジャングルを回ったのだったが、象の順番を待っている間に日本人の男性が「日本人か」と尋ねて、木の繁みの中に入ると山蛭に噛まれると注意してくれた。海外協力隊としてネパールに派遣され4年になるそうだ。私がトリブバン大学の荒廃の驚愕を話すと同感して、協力もネパール人の「のり」と言うか、受入れ態勢がもう一つで徒労のようである。あんまり為すこともないので毎日ゴルフばかりしていると嘆いていた。ランタン部落へも北大教授のお供で、氷河の末端が部落にどんな影響（被害）を及ぼすか、調査のための器材を設置してきたとのことであった。純朴なランタン部落の友よ、どうか研究の成果を見ることなく機器が損なわれることの無いように。

たった一週間にも足らぬ滞在でネパールを評することは、正鵠をはずれた僭越至極なことであろうが。世界に冠たる景観を国土に持つネパールが、この財宝を地球全人類の喜びとして、貴国が栄え向上することを願ってやまない。

情報がないということは恐ろしいというか強いもので、故国で送り出して下さった人々がサイクロンの通過を案じて下さっている中、知らぬが仏、ダツカにも寄港して雲の上の朝日を堪能するばかり。凝視し十時間あまり。五月晴れの端午の節句、子供の日の名古屋空港にへたへたと降り立った。

「貴女！ その脚でようそんな所へ連れて行って貰ったわね。よかったね！」と私のこの度の旅行を知った友人知己は、わが胸のつかえがおりたように感動して下さる。

この度はご同行の皆様のお支えと言うよりは、お守り立てによってショックと初体験一杯の素晴らしい旅行をさせて頂きました。私の晩年にこんなダイナミックな日が用意されていましょうとは予想もしないことでございました。

厚く御礼申し上げます。有難うございました。